

分科会	小5年①	都市名	豊 橋
提案者	豊橋市立大村小学校		山田 篤志

研究テーマ

持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業（第3年次）
—ハウスでがっちり！日本一の大村ラディッシュ—

1 はじめに

豊橋市立小学校社会科研究部では、「持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業」を研究テーマとし、取り組んできた。本年度は、その3年次にあたる。本実践では、下記のことには焦点をあてて、取り組むことにした。

『持続可能な社会』

多様な価値観や複雑な産業構造から成立している現代社会では、一個人・一企業・一国家の利益だけを追求しては社会全体の発展は望めない。互いの主張を理解しようと努め、よりグローバルな視野に立ち、社会の全体の成熟を考えることで、持続可能な社会が実現できる。

『学びを問い合い』

子供自身が、自分と社会事象との関わりを見つめ、友と学びを共有する中で、自らの学びを問い合い、振り返り、自己の変容に気づくことが学習の深まりを生み、社会事象を「自分のこと」としてとらえることにつながる。

『自己の責任を考える』

「持続可能な社会」の実現には、社会に主体的に関わろうとする市民が不可欠である。地域には窮地に立たされながらも、自己のかかわる産業の発展を願って努力する人達がいる。そうした人の生き方にふれることで、子供達は、将来、社会を担う主権者としての自己の責任について考えるようになる。

本研究主題1年次では、第6学年「3人の武将と全国統一」の学習で、「波乱万丈の戦国武将戸田氏」という単元を構想した。そこでは、先人の様々な決断の積み重ねが歴史であり、自分たちが下す決断がこれからの歴史をつくっていくのだという意識をもたせるとともに、よりよい生き方をめざすための決断の必要性について考えさせることができた。2年次においては、第5学年「わたしたちの生活と食糧生産」の学習で、「ウズラ日本一を守れ！」という単元を構想した。そこでは、業界で精力的に活躍している養鶏業者の思いに寄り添わせ、その生き方にふれさせることで、子供は、生産に携わる人々が産業界全体の発展を目指していることに気づき、持続可能な社会の実現とは何かを個々が考えるようになった。

本年度は、第5学年「わたしたちの生活と食糧生産」の学習で、地域のラディッシュ作りを教材化した。地域では、狭い耕地面積を有効活用するために施設園芸が盛んに行われている。その中でも、ラディッシュ農家を中心に部会（組合）を組織し、協力して生産・出荷に従事している人々に焦点をあて、地域の農業が生き残っていくために取り組んできたラディッシュ作りの工夫や人々の努力、そして願いに気づかせたいと考えた。そして、部会で協力して厳しい品質管理を行い、安定して市場に出荷することで築いてきた、量・質ともに日本一の「大村ラディッシュ」というブランドを守り、さらなる発展を願って日々奮闘している人々の姿をとらえさせたい。また、そのような人々の過去から現在に至るまでの苦労と、ラディッシュ作りの未来に対する思いにふれさせることで、自分と地域の産業とのかかわりに目を向けさせ、産業界全体の中で生き残っていくことの意義に気づかせたい。

2 研究の基本的な考え

(1) 研究の仮説

本年度の授業研究において、次のような仮説を設定する。

- ① 子供の追究意欲を高める工夫をし、個々の考えを効果的に関わらせる場を設定すれば、ラディッシュ農家に対して切実感を持ち、より確かな足場立って考えを発表し、自分の思いを深めたり再構築したりすることができるだろう。
- ② 部会を組織することで協力して生産・出荷を行う体制をつくり上げた生産者の努力や、現実の社会的問題に対する生産者の苦悩を考えさせる場を設定すれば、持続可能な社会を実現するために、部会の継続・発展と産業界全体の活性化を図りながら、地域の産業を守る必要があることに気づくだろう。
- ③ 困難な状況であっても、地域の産業を守るために奮闘する人々の覚悟や願いにふれることで、地域の産業に愛着や誇りをもち、それを守るための自分なりの関わり方を考えることができるだろう。

(2) 研究の手立て

テーマに迫るために次のような手立てを具体的に講じ、実践を検証していく。

- ① 友達とより深く関わるための、個々の確かな足場づくり
ア) 体験活動や調査活動を取り入れて見聞を広めたり、朱書きや対話・教室掲示で思考の整理をしたりする。
イ) 一人学びによって自分の考えをもたせ、全体で共有したり、練りあったりする場面を設ける。
- ② 持続可能な社会の実現の重要性を認識するための学習活動の展開
ア) 協力して生産・出荷できるように部会を組織した生産者の努力と、消費者のニーズに合わせて選別を行う生産者の工夫をとらえさせるため、出荷場へ見学に行ったり自作資料を活用したりする。
イ) 時代状況による産業の変化や農業が抱えている根本的な問題点を、統計資料や聞き取り調査から理解し、ラディッシュ農家がおかれている厳しい現状について考えさせる。
- ③ 部会の継続・発展を願う人々の相当な覚悟にふれ、自分なりの関わり方を考える場の設定
ア) 40年かけて築き上げてきたブランド野菜としての地位を守っていくために、部会で協力して問題を乗り越えようと努力している生産者をゲストティーチャーとして活用する。
イ) 地域のラディッシュ農家を教材化し、困難な状況でも、部会のみんなで日本一の大村ラディッシュを守ろうとしている人々の思いに迫ることを目指した単元構成にする。

(3) 抽出児

A子：学習意欲が高く、何事にも一生懸命取り組むことができる。5年生になってからの社会科の学習では、国土には地形や気候の違いがあり、そこに住む人々は、自然の条件をうまく利用して生活していることをよく理解している。しかし、そのような理解は表面的な知識にとどまり、社会的事象と自分との関わりを意識しているとは言えない。地域の産業を学習していく中で、生産者の努力や工夫に気づき、話し合いを通して自分の考えを深めたり再構築したりすることで、持続可能な社会の実現を目指すための自分なりの関わり方を考えられるようになってほしい。

3 単元構想図

〔教師の支援〕

※1 大村の農業の規模とビニールハウスの存在に気付かせるために、3枚（庄内・十勝・大村）の航空写真を用意する。

※2 米・小麦・ジャガイモなどの主要な作物は、大規模生産されていることをおさえるために、3地域の平均的な耕地面積を画用紙を使って比較する。

※3 ハウスマップ作りを通して、露地栽培と施設栽培の違い、大村の農業の歴史、つまものやラディッシュの栽培について出てきた疑問を解決させるために、自作資料を提示する。

※4 ビニール（ガラス）ハウスの耕地面積の広さをとらえるために、校区地図や航空写真を活用する。

※5 ビニールハウスを使った農業を実際に見たり、農家の人の話を聞いたりするために、ラディッシュ農家の浅岡さんの家へ見学に行く。

※6 部会で協力して出荷している様子を見るために、出荷場へ見学に行く。

※7 ラディッシュが高級野菜で、一般のスーパーではあまり売られていないことに気づかせるため、休日を利用してラディッシュ探しをするよう助言する。

※8 大村ラディッシュの見た目と味のよさを実感させるために、大村ラディッシュと、大村以外で作られているものと、自分たちで育てたものを食べ比べる。

※9 ラディッシュの選別や部会の他の役割について全員で確認するために、部会長の伊藤さんのインタビュー動画を視聴する。

※10 部会が抱えている問題点と、今後の展望を話してもらうために部会長の伊藤さんとラディッシュ農家2代目の鈴木さんをゲストティーチャーに招く。

※11 どちらの立場も、根拠をもって発言できるように、具体的な資料を用意するよう声をかける。

※12 作った新聞や広告などを、一般の人たちに見てもらうために、JA豊橋の店舗に掲示してもらう。

3枚の写真の地域では、どんな農業をしているのかな。①②（各地の航空写真をもとに話し合い）※1※2

どうして大村にはたくさんのビニールハウスがあるんだろう。大村の農業について知りたいことが出てきたよ。

大村のビニールハウスを使った農業について、もっといろいろ知りたいな。③④（大村ハウスマップの作成）、⑤⑥（一人調べ）⑦（発表）※3

大村の農業の歴史

ビニールハウスの数 ※4

作物

生産量と販売高

大村では、狭い土地を生かし、ビニールハウスを利用することで、つまものやラディッシュをたくさん作っているんだね。

ビニールハウスを使った大村の農業を見てみたいな。⑧⑨（浅岡さん宅に見学）※5

大村のラディッシュは、いろいろとこだわって作られているみたいだよ。

日本一のラディッシュ作りについてもっと知りたいな。⑩⑪（一人調べ）⑫（発表）⑬（出荷場の見学）⑭（見学のまとめ）※6

組合って何だろう？

どこで売られているのかな？※7

どうやって運ばれるのかな？

他のラディッシュと何が違うのかな？※8

品質を維持するための工夫は何か？⑮（話し合い）

大村ラディッシュの品質（見た目、味）が良いのは、栽培や選別の仕方にこだわっているからだよ。種を買ったり出荷をしたりする時に部会が関係しているみたいだね。

大村のラディッシュ農家にとって、部会はどれくらい大切なんだろう。⑯（部会長の伊藤さんの話）※9

・22人の農家が協力してラディッシュを作っているところは、大村だけなんだって。みんなでやっているから、市場にいつもラディッシュを出荷することができて、信頼されているんだね。

大村ラディッシュが全国一の生産量をあげられるようになったのは、部会で協力しているからなんだね。でも、全国シェアが減っているって聞いたけど、どうしてだろう。

全国シェアが下がってきているのはなぜかな。⑰

・作っている人が減って、収穫量が減っているからなんじゃないかな。
・バブル景気のあとで、ラディッシュがあまり売れなくなったからじゃないかな。

部会長の伊藤さん、ラディッシュ農家2代目の鈴木さんに聞いてみよう⑱ ※10

他産地との競争

高齢化

後継ぎ不足

いろんな問題があるうえに、不景気で、前よりもラディッシュが売れなくなっているんだって。大村のラディッシュ農家の人たちはすごく困っているよ。

大村ラディッシュの収穫量は、これからどうなってしまうのかな。⑲（話し合い）※11

＜減っていく＞

・ラディッシュの値段が下がっていてもうけが少なく、農家の数が減っていくから。
・全国シェアが昔は80%だったのが、今は50%に下がっているからこれからも下がり続ける。
・ラディッシュが売られている店は少なく、あまり売れないから。

＜減っていない＞

・鈴木さんが、ラディッシュ作りは楽しいと言っており、農家の数は減らないと思うから。
・大村ラディッシュは、形が良くて、見た目も良く、市場での評判が良いから。
・ラディッシュをたくさん売る方法を部会の人が一生涯懸命考えているから大丈夫。

2代目の鈴木さんは、どういう思いでラディッシュ作りを引き継いでいるのかな。

大村園芸部会の人たちは、40年以上前からみんなで協力して大村ラディッシュを作りあげてきたんだね。大変な問題もあるけど、「日本一」というプライドをもってラディッシュを作っていてカッコいいな。

大村ラディッシュをこれからも守っていくために、自分たちにはできないかな⑳（話し合い）、㉑（まとめ）

・今まで調べてきたことを新聞にまとめて、校区の人たちに大村ラディッシュのことを知ってもらいたいな。
・見やすい広告を作って、たくさんの人に大村ラディッシュの宣伝をしたいな。
・大村ラディッシュを使った新しい料理を考えて、ラディッシュを有名にしたいな。 ※12

大村ラディッシュの良さをもっと多くの人に知ってもらい、たくさんの人に買ってもらう。日本一の品質と生産量を築き上げてきた大村のラディッシュ作りをこれからも応援しよう。

4 研究の実際

(1) 友達とより深く関わるための、個々の確かな足場づくり～手立て①の有効性を探る～

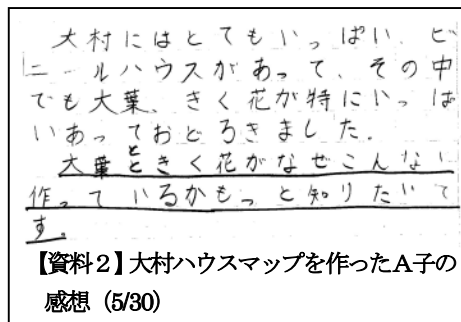
①地域の農業の特徴を知る～手立て①ア)～

大村校区は、豊川の右岸に位置し、古くから農業が盛んな地域である。1965年に豊川放水路が完成し、大葉、菊花（食用菊）、ラディッシュ、花穂（シソの花）などのつまもの野菜が施設で多く作られるようになった。多くの子供は、地域でつまもの野菜が盛んに作られていることを知っている。しかし、地域で作られている作物が、全国的に高いシェアを占めていることを知っている子は少ない。A子は、大村で作っている作物として、大葉、菊花、花穂、ラディッシュと書いており、施設でつまもの野菜が多く作られていることは知っている。しかし、全国的に有名な作物としては、大葉だけを書いており、その理由も「この辺でたくさん作っているから」という感覚的な内容で、校区の農業の実態について知っているとはいえない。

このような子供の実態をふまえ、まず、地域の農業の様子に関心をもち、その特徴を知ることから始め、地域の農業について調べていく中で、農家の人たちの思いに迫れるような単元を考えた。単元の導入で子供は、「どうして大村には、たくさんのビニールハウスがあるんだろう。」「どのビニールハウスでどんな作物を作っているんだろう。」などの疑問をもっていた。そこで、自作の資料を用いて大村の農業の歴史や施設園芸、つまもの野菜などについて学習するとともに、「大村ハウスマップ」を作り、どのハウスでどんな作物を作っているのか調べることにした。【資料1】大村ハウスマップを作成してみると、ハウスの多くは大葉・菊花・ラディッシュが作られており、ハーブやエディブルフラワー（食用花）など子供が今まで知らなかった作物も作られていることがわかった。ハウスマップを教室に掲示し、対話したり、感想を書いたりした中で、「ハーブやエディブルフラワーは、どうやって作っているんだろう。」「大葉と菊花がなぜこんなに作られているかもっと知りたい。」「【資料2】など、いろいろな疑問が出た。その疑問の多くは、自作資料によって解決できた。一方で、「大葉やラディッシュの作り方はみんな同じか。」という疑問については、「それぞれの農家ごとで作り方は違うんじゃないかな。」「作り方はだいたい同じだと思うよ。」と意見が分かれ、その場では解決しなかった。そこで、学校の農園で実際にラディッシュを栽培してみたり、地域のラディッシュ農家のお宅に見学に行ったりして追究することで、校区の農業の実態に迫らせるようにした。さらに、教室掲示や対話・感想へのコメントなどで子供の思考を整理することで、友達とより深く関わるための共通の足場づくりを行った。



【資料1】大村ハウスマップの作成



【資料2】大村ハウスマップを作ったA子の感想（5/30）

②大村ラディッシュのこだわりを知る～手立て①ア)イ)～

ラディッシュ農家の浅岡さんは、40年前からラディッシュの栽培を始め、大村の中でも最も長くラディッシュを栽培している一人である。50aほどの耕地に3棟のビニールハウスをもち、ラディッシュだけを栽培している。

子供は事前に、浅岡さんに聞きたいことをノートにまとめた。その内容は、①ビニールハウスについて、②浅岡さんのラディッシュ作りについて、③ラディッシュのことについてと、大きく3つに分類された。①では、ビニールハウスの温度調節の仕方についての質問が出された。浅岡さんによると、ラディッシュは高温に弱く、高くても28℃を保たなければ上手に育たない。室内を温めるためにビニールハウスを利用していると思っていた子供からは、「ラディッシュは暑さに弱いんだ。でも、ハウスの中はすごく蒸し暑いよ。」というつぶやきが聞こえた。浅岡さんは「ハウスの中で育てるのは、雨に当てないためだよ。雨に当たると、ラディッシュの色が悪くなってしまうんだよ。」と答えた。②では、浅岡さんがビニールハウスでラディッシュ栽培を始めたきっかけや始めた当初に苦労したことなどの質問があげられた。大村は耕地面積が狭いので、効率的に栽培できるラディッシュをはじめ、大葉などのつまもの野菜の栽培が盛んになったこと、ラディッシュは暑さに弱く、連作障害や病気になりやすいので栽培には手間がかかることなどを話してもらった。③では、特にラディッシュの病気についての質問があげられた。実は、見学をお願いをした時、浅岡さんのラディッシュが一部病気にかかっていた。そのため、他のラディッシュ農家を紹介すると言われたのだが、ラディッシュ作りの大変さを知る良い機会だと考え、無理を言ってみせてもらった。ハウス内には、病気のために捨てられたラディッシュが無数にあたり、子供の目をひいていた。【資料3】見学後のまとめでは、「大村で作られているラディッシュは大村ラディッシュという名前で出荷されているよ。」「大村ラディッシュは北海道から九州まで、全国に出荷されているよ。」「日本全体のラディッシュの約半分を生産しているよ。」など、大村ラディッシュについてのたくさんの事実が出され、

みんなで共有できた。さらには、「浅岡さんのハウスには、捨てられたラディッシュがたくさんあったよ。」「まだ食べられそうなのにもったいない。どうして売らないのかな。」という意見が出た。出荷されずに捨てられるラディッシュは、選別の場面でも見られた。浅岡さんによると、冬場は2～3割、夏場は多い時で5割ほど破棄されるラディッシュが出るという。「どうして捨てられたラディッシュがたくさんあるのか。」という疑問に対して、「少しでも傷がついていると、お客さんに買ってもらえないからじゃないかな。」「大村ラディッシュはすごくこだわって作られ



【資料3】捨てられたラディッシュ

ているんだよ。」という意見が出て、大村ラディッシュの品質の高さに目が向く子供がいた。見学後のA子の感想には、「ラディッシュのことはあまり知らないんだと自分で思いました」と書かれており【資料4】、見学とその後のまとめの時間を通して、A子に新たな気づきがあったことがうかがわれる。以上のことから、個々の確かな足場づくりのための手立てア)と、友達とより深く関わり自分の思いを深めるための手立てイ)が有効だったことがわかる。

大村のラディッシュは日本全体の50%もしめていることが全く知りませんでした。ラディッシュのことはあまり知っていませんでしたと自分で思いました。

【資料4】見学後のA子の感想(6/7)

(2)生産量日本一を守る部会の存在から、持続可能な社会の実現の重要性を考える～手立て②の有効性を探る～

①部会の役割について知る～手立て②ア)～

見学後のまとめの時間では、「日本全体のラディッシュの半分は大村ラディッシュって言うんだけど、実際に売っているところを見たことないよ。」という疑問があげられた。大村ラディッシュが売られているところを見たことがない子はたくさんおり、休日を利用して大村ラディッシュが売られているスーパーを探してみることにした。調査の結果、豊橋市・豊川市内の6軒のうち、2軒で大村ラディッシュを見つけることができた。価格は、5玉198円で、「あんな小さなラディッシュが1個40円もするんだ。ラディッシュは高級品なんだね。」と、ラディッシュの予想以上の価格の高さに驚く子もいた。また、「思ったほど近くのスーパーで売られていないんだ。浅岡さんの家には、ラディッシュの箱がたくさんあったけど、他にどんな所に運ばれているんだろう。」と大村ラディッシュの流通について関心をもつ子がいた。大村ラディッシュの流通について調べていくには、大村のラディッシュ農家が中心となって組織し、大村ラディッシュの出荷を行っているJ A豊橋大村園芸部会についてふれなくてはならない。また、浅岡さん宅に見学に行った時にも、ラディッシュの作り方について質問した子がいたが、その中で「作り方は、組合で決めている。品種も2種類と決まっている。」と聞かされていた。そのため、「組合って何だろう。」と疑問に思う子供は何人かいた。子供の問題意識と、今後の学習展開を考えると、部会の役割を知る必要があるように思われた。そのため、自作資料で部会(組合)の役割について学習するとともに、大村小学校の近くにあるラディッシュの出荷場へ見学に行き、部会長の伊藤さんの話を聞かせてもらうことにした。

出荷場には、前日に農家が運んできたラディッシュの箱がたくさん積んであった。暑さに弱いラディッシュを保存するための大きな予冷庫があり、室温は5℃に保たれている。中に入ると「寒い」とだれもが口にした。中で出荷の作業を行っている人たちは、みんな長袖長ズボンである。それを見たA子は、「夏だけじゃなく、冬でも予冷庫の中で働いてとても大変だな。」とノートに書いていた。出荷場を見学を通して、ラディッシュを入れる箱や袋は、部会で共同購入されており、箱には生産者番号が書かれていること、大村ラディッシュの生産者は22名であること、全国の65の市場にラディッシュを出荷していること、ラディッシュは形、大きさごとに分けられ、大きさは7段階に分けられていることなどを知った。また、結婚式やディズニーランドの関連ホテルなどで使われるマイクロラディッシュ(普通のものより小さいラディッシュ)も見せてもらった。「こんな小さなラディッシュも作っているなんて知らなかった。」と口にする子が多くいた。見学後、ラディッシュの出荷の様子や部会の役割など、見学を通して知ったことや思ったことを全体で共有する場を設定した。そこでは、「大村ラディッシュの品質が良いのは、種や選別にこだわっているからだよ。」「ラディッシュの出荷には部会の役割が大きいよ。」という、大村ラディッシュの品質と部会の役割との関係を意識した意見が出された。しかし一方で、「出荷場は寒かった。」「マイクロラディッシュはどうやって作るのか(A子)」などの素朴な感想や疑問で終わっている子がおり、部会があってこそ大村ラディッシュというブランド野菜が成り立っているという認識に至っていない子が見られた。そのため、部会の重要性についてもう一度全体で確認する必要があると感じられた。そこで、「ラディッシュを7段階に分けるなんて知らなかった。面倒だから適当に分けていると思った。」という意見を取り上げ、7段階の選別を可能にしている部会の役割を知ることから、選別以外の部会の役割にも目を向けさせようと考えた。そして、

「ラディッシュを7段階に分ける必要はあるのか」という課題をみんなで話し合った後、事前に撮影した伊藤さんのインタビュービデオを流し、部会の役割について改めて確認した。7段階に分けている理由は、買い手の細かな要求に応えるためであり、個人ではとてもできないことや、部会がなかったら「大村ラディッシュ（ラディッシュ）」と書かれた箱や袋、そして種すら手に入らないことなどを伊藤さんに話してもらった。【資料5】のA子の感想には、「部会がぜったい必要だ」と書かれており、大村ラディッシュというブランド野菜が存在し、全国に出荷できるのも、ラディッシュ農家が部会を組織し、協力して生産・出荷しているためであることが理解されている。以上のことから、協力して生産・出荷ができるように部会を組織している生産者の努力と、消費者のニーズに合わせて選別を行う生産者の工夫をとらえさせるための手立てア）が有効だったことがわかる。

②大村ラディッシュの危機を知る～手立て②イ）～

これまで子供は、大村ラディッシュの品質の良さや生産量の多さ、そして大村園芸部会の役割について学習してきた。その結果「大村ラディッシュは日本一」「見た目や味が良くてすごい」など、大村ラディッシュの良い面だけを見るようになった。しかし、実際のラディッシュ農家は、バブル崩壊後からラディッシュの需要と価格の低下に悩んでおり、特にリーマンショック後は深刻な不況に頭を抱えている。さらに、農家の高齢化と後継者不足も深刻な問題であり、このような日本の農業全体に関わる問題を子供に考えさせる必要がでてきた。そこで、大村と福岡・北海道など他産地の収穫量の推移を表したグラフを子供に示した。【資料6】子供からは「大村の収穫量がだんだん下がっているよ。」「大村と違って福岡の収穫量は減っていないね。少しずつだけど、上がっているよ。」などの意見が出され、次第に大村ラディッシュの収穫量が減っている理由について考え出した。「ラディッシュはもともと外国の野菜だから外国との競争になり、種を輸入しにくくなったんじゃないかな。」「昔と比べて、ラディッシュを作る農家が減っているからじゃないかな。（A子）」などの予想があげられた。そして、「もっと減ってしまうんじゃないかな。」という悲観的な意見を口にする子もいたので、伊藤さんとラディッシュ農家2代目の鈴木さんをゲストティーチャーとして招くことにした。伊藤さんには、大村のラディッシュ農家の現状を話してもらい、鈴木さんからは、低迷する状況の中、部会で取り組んでいる事柄について話してもらうことにした。伊藤さんからは、不景気・高齢化と後継ぎ不足・他産地との競争について話してもらった。A子は、「ラディッシュ農家が減っていて、後継ぎがいなくて聞いてとても大変な時」「しかも昔にくらべて、ラディッシュが安くなってとてもピンチ」と、大村のラディッシュ農家がおかれている状況の厳しさを知った。【資料7】このことから、ラディッシュ農家がおかれている厳しい現状について考えさせるための手立てイ）が有効だったことがわかる。

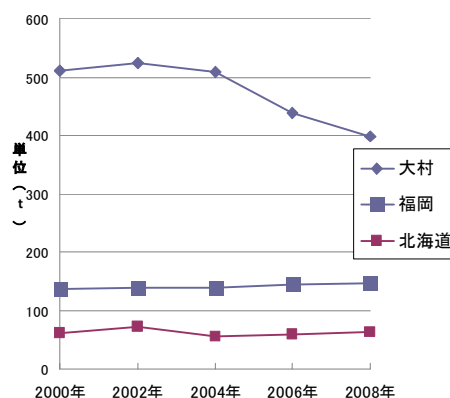
(3)部会の発展を願い、努力する人々の生き方にふれ、自分なりの関わり方を考える～手立て③の有効性を探る～

①大村ラディッシュのこれからを案じる子供～手立て③ア）イ）～

また、鈴木さんからは、ラディッシュの世間での認知度を上げるために、他産地の農家を集めて話し合う場を設定したり、調理師専門学校や料理店にラディッシュをもって行き、ラディッシュを使った料理を考えてもらったりしたことを聞いた。また、現在スーパーでは1袋5玉入で売られているが、家族の少人数化を考え、3玉入を試験的に売り出していることも聞いた。そして、大村ラディッシュは、品質では他に負けない自信があり、7段階に分けている所も大村だけであることを話してもらった。それを聞いたA子は、「7段階は大村だけと聞いて、うれしく思いました。」と感想に書いている。【資料7】学習前はあまり知らなかった大村ラディッシュが、学習が進むにしたがって自分が住んでいる地域の誇れる作物へと認識が深まり、A子の思いがラディッシュ農家の思いへ寄り添いつつあることがうかがえる。そして、生産量日本一の大村ラディッシュが、これからも日本一

みんなで、ラディッシュを作ると、安定きう給できて、発、ほうすチロール、ふくろ、種が安く買えて、一人でやるより部会に入っている方が、いいと思いました。しかも、みんなで意見を出し合って、さいばい技術を高めることができるから部会がぜったい必要だと思う。

【資料5】ビデオを見た後のA子の感想（6/20）



【資料6】大村と他地域のラディッシュ収穫量のグラフ

今はラディッシュ農家が減っていて、後継ぎもいないと聞いて、とても大変な時なんだと思いました。しかも昔にくらべて、ラディッシュが安くなるととてもピンチに思いました。けい、7段階は大村だけと聞いて、うれしく思いました。

【資料7】伊藤さん・鈴木さんの話を聞いた後のA子の感想（6/21）

であり続けてほしいという願いをもつようになった。このようなA子の思いは、地域の農業を守り、発展させたいという持続可能な社会の実現を願う一つの姿としてとても重要である。

大村のラディッシュ作りに誇りを感じているA子たちは、「40 年も収穫量日本一を続けてきたのに、これからどうになってしまうだろう。」「福岡に日本一を奪われてしまうんじゃないかな。」と、大村ラディッシュの今後に不安を感じ始めた。ラディッシュの需要を上げるために部会として取り組んでいる話を聞き、「最後は、売れる方法を見つけてくれそう (A子)」のように、現実には深刻な問題があるが、大村ラディッシュと大村園芸部会の良さを生かせば収穫量を上げることができると考える子がいた。一方で、ラディッシュの収穫量を上げる努力を「自分はやらないけど、ラディッシュ農家の子がやればいい」と他人事でとらえている意見もみられた。そこで、A子の思いをみんなの中にも広めたいという意図から、「大村ラディッシュの収穫量は、これからどうなるのかな」という課題で話し合うことにした。この話し合いを通して、ラディッシュ収穫量日本一を守り続けている農家の人々の思いに迫らせ、地域の産業に対する自分なりの関わり方を考えさせたいと考えた。

まず、大村ラディッシュの収穫量が「減らない」と考えている子は、A子を含めて2人しかいなかった。このことから、高齢化・後継ぎ不足・他産地との競争がとても大きな問題であることを子供が痛感していることがうかがえる。また、「一時的に減ってもまた増える」と考えている子が4人、「減るけど、増えて欲しい」と考えている子が10人いた。「一時的に減ってもまた増える」と考えている子は、高齢化や後継ぎ不足でしばらくは減るかもしれないが、7段階の選別を続け、3玉入のラディッシュの販売量を増やせばラディッシュの需要が増え、収穫量も上がっていくだろうと考えている。「減るけど、増えて欲しい」という立場の子は、現実にある問題は解決が難しいだろうと考えている。しかし、今までの学習を通して、地域の産業に愛着をもち、いろいろな農家の人々と出会う中で「増えて欲しい」という心情をもつようになったと考えられる。一方で、6人の子は「減ってしまうのは仕方がないことだ」と考えている。現実の問題は解決できず、グラフの推移をみてもこのまま下がっていくだろうと考えている。農家への思い入れも少なく、「大村からラディッシュ農家がなくなる」「大村ラディッシュがなくなる」と考えている子もいた。【資料8】にあるように、A子は「部会の人収かく量を減らさないようにがんばってもらおう」と書いている。この記述からは、1軒の農家の力だけではなく、部会で協力していくことが収穫量を減らさないためには必要だという考えが読み取れる。【資料9】の下線部の発言は、鈴木さんから聞いた部会が取り組んでいる試みを根拠にして、ラディッシュが売れるようになるという主張である。A子が言っていることは、みんなも知っていることであるが、実際にどんな新しい料理が考えられているのかはだれも知らなかった。A子は、伊藤さんがゲストティーチャーで来校されたときに、個人的に質問した中で、雑誌に掲載されている広告のことを知った。それを証拠としてみんなに提示したことで、説得力のある発言になった。A子の発言後のC2、C3の反応をみると、A子の発言に同調している様子がわかる。

A子の発言を聞いても「それでも減ってしまう」と考える子は何人もいた。そういう子たちから「新しいメニューを考えても、それほど売れるようにはならないと思う。」「そんなに簡単に売れるようになるくらいなら、もう売れるようになっているよ。」などの反対意見が出された。話し合いは次第に「それだけ大変な状況の中、鈴木さんのような2代目の人たちは、どうして継ごうと思ったのかな」という論点へと移っていった。「鈴木さんはお父さん達から引き継いだ大村のラディッシュ作りを自分の代で終わりにしたくないと考えたと思う。」「日本一のラディッシュを作っていることにプライドをもっているから引き継いだ。」「自分の生まれ育った地域の名前がついたラディッシュを大切に思っているから。」などの意見が出された。

ラディッシュ農家が減っても、まだ、ラディッシュ農家とやっている部会の人収かく量を減らさないようにがんばってもらおう??

【資料8】「大村ラディッシュの収穫量は、これからどうなるのかな」に対するA子の考えの一部① (6/23)

- T1 大村ラディッシュの収穫量が減らないと思っている人の理由は？
- A子 大村ラディッシュ(ラディッシュ)は味だけではなく、見た目もこだわっているから、いつかは売れると思います。
- C1 ラディッシュ農家がなくなったら料亭とかが困ると思うから、そういう店がラディッシュを買ってくれると思います。
- (中略)
- A子 大村園芸部会は、ラディッシュが売れる方法や有名になる方法をいっぱい考えています。例えば、5玉を3玉にしたり、調理師専門学校やお店にもって行って、料理を考えてもらっています。この雑誌にも載っています。(雑誌「オレンジページ」を開いてみんなに見せる)
- (みんな驚く)
- T2 このラディッシュの写真は伊藤さんの家のラディッシュだそうです。
- C2 こんなラディッシュの料理、見たことないよ。食べてみたい。
- C3 部会でこういう取り組みを続けていけば、もしかしたら収穫量は減らないかもしれない。

【資料9】授業記録 (6/28)

せ、かく、ラディッシュの日本一なんだから、福岡や、北海道に負けて、日本二などにならないようにしようと思。て引きついた。

【資料10】「どういう思いでラディッシュ作りを引き継いでいるのかな」に対するA子の考え (6/28)

A子は【資料10】のように「ラレシの収かく量日本一なんだから…日本二などにならないように…」と考えていた。そこからは、収穫量が日本一という誇りとそれを守ろうとする農家の人たちの思いに迫っている様子が読み取れる。また、A子は、もし自分がラディッシュ農家の後継ぎだったら「継ぐ」と答え、「大村が、ラレシの収かく量一位だからそれを、続けていきたいと思うから」と述べている。そこからは、地域のラディッシュ作りのこれからを真剣に考え、積極的に関わろうとするA子の姿勢が読み取れる。

②大村ラディッシュを守っていくために、自分なりの関わり方を考える子供～手立てア)イ)～

話し合いを通して、「減る」派も「減らない」派も、日本一の大村ラディッシュをこれからも守っていききたいという点で一致していることが明らかとなった。また、浅岡さん・伊藤さん・鈴木さんをはじめ、大村園芸部会の人たちが大村ラディッシュを守るために努力していることも共有できた。すると、「大村ラディッシュを守っていくために、自分たちにできることはないかな」というつぶやきが出るようになった。「新聞を作って大村ラディッシュの良さをもっとたくさんの人に知ってほしい(A子)」「チラシを作って、大村ラディッシュの宣伝をしたい」という意見が上がり、それぞれの方法で取り組むことにした。A子は新聞の中で、現在のラディッシュ農家がおかれている状況や、大村ラディッシュの品質の良さ、大村園芸部会の役割についてわかりやすくまとめた。新聞を作り終えたA子は「大村ラディッシュはブランド野菜でおいしいから、日本中でもっと食べてほしい」と感想を述べていた。大村ラディッシュがもっと売れるようになるためには、一般の人たちに大村ラディッシュの良さをもっと知ってもらわなければならない。「自分たちが作った広告をいろんな人たちに見てもらいたい」という声が聞こえたことから、JAにお願いして店舗に掲示してもらうことにした。【資料11】その後の感想でA子は、「大村ラディッシュが有名になって、これからも日本一を守り続けてほしいな」と述べ、A子をはじめ多くの子供が大村ラディッシュと地域のラディッシュ農家の発展を願っていた。以上のことから、部会の継続・発展を願う人々の相当な覚悟にふれ、自分なりの関わり方を考えさせるための手立てア)イ)が有効だったことがわかる。



【資料11】JA豊橋で掲示された新聞やラディッシュのマスコット

5 研究の成果と今後の課題

(1)手立ての検証

①友達とより深く関わるための、個々の確かな足場づくり

本実践では、大村ハウスマップ作り・浅岡さん宅の見学・出荷場の見学・ゲストティーチャーの活用など、多様な活動を取り入れることで、見聞を広め、自分の考えをもたせる工夫をした。また、校区の農業やラディッシュについて説明した「大村ハウス新聞(No. 1～No. 10)」を作り、子供の農業に関する知識を補った。さらに、ノートへの朱書き、対話、教室掲示などで子供の思考を整理し、話し合いでより深く友達と関わり合えように工夫した。大村ハウスマップ作り、浅岡さん宅への見学、出荷場への見学など、活動の後には、必ず意見交換し、全体で共有する場を設けた。また、「どうして捨てられたラディッシュがたくさんあるのか。」「大村ラディッシュの収穫量は、これからどうなるのかな」などのように、意見を交換する中で課題を作り、話し合い活動へとつなげていった。【資料12】からは、話し合いを通して「大村ラレシの収かく量は減らないでほしい」という思いを強くするA子の思いがよくわかる。これらのことから、個々の確かな足場をつくるために様々な活動を取り入れたり、話し合いの場を設けることで考えを深めたりしたことの有効性が実証されているといえる。

話し合いをして、わたしは、大村ラレシの収かく量は減らないでほしいと思っています。けれ

【資料12】話し合い後のA子の感想(6/29)

②持続可能な社会の実現の重要性を認識するための学習活動の展開

本実践では、地域の農業を守っていくためには部会の役割が必要不可欠であり、同時に農業全体の活性化も欠かせないという点に焦点を当てて単元を構成した。また、地域でラディッシュ作りが始まった頃から農家同士の協力体制をつくりあげてきた人々の努力や、現実の社会的問題に対する農家の苦悩を考えさせることで、持続可能な社会の実現の重要性を認識できる学習展開にした。A子は単元の始めは「ラディッシュのことはあまり知らない【資料4】」と書いており、地域の農業についてもあまり知らなかった。しかし、見学・インタビュービデオ・自作資料・ゲストティーチャーなどを取り入れながら地域のラディッシュ作りについて学習するにしたがって、大村ラディッシュと部会の将来について真剣に考えるようになった。単元を終えた時のA子の感想には「大村ラレシが日本一をずっと守ってほしい【資料13】」とあり、ラディッシュ生産量日本一をこれからも守

ってほしいと願うA子の姿をみることができる。また、部会長の伊藤さんのインタビュービデオを見たA子は、「みんなで、ラレシを作ると、安定きょう給できて、発ぼうスチロール、ふくろ、種が安く買えて、一人でやるより部会に入る方が、いいと思いました【資料5】」と述べている。そこからは、農家が協力することで発展してきた大村のラディッシュ作りについての理解が読み取れる。これらのことから、持続可能な社会の重要性を認識するために行った種々の体験調査活動や資料をもとにした学習が有効であったことが実証されている。

③部会の継続・発展を願う人々の相当な覚悟にふれ、自分なりの関わり方を考える場の設定

本実践では、統計資料や聞き取り調査などによって、ラディッシュ農家がおかれている厳しい現状について考える場面を設定した。【資料14】では、伊藤さんの話から、後継ぎ不足・ラディッシュの低価格化・農家の高齢化を知ったA子の様子がわかる。また、「30年前950円ぐらい→850円ぐらい」のように、具体的に数字で理解されており、ラディッシュの価格がいかにか下がっているかがよりはっきりわかっている。このような点からも、手立ての有効性をみることができる。

A子は出荷場の見学や伊藤さんのインタビュービデオの視聴を通して、「部会がぜったい必要【資料5】」という思いを強くもつようになった。また、【資料15】でも部会の役割の重要性にふれている。このようなA子の姿からは、40年かけて築き上げてきた大村ラディッシュというブランドを守るためには、部会の存在が不可欠であるという認識が育っていることがわかる。「大村ラディッシュの収穫量は、これからどうなるのかな」という課題での話し合いでは、現実にある様々な問題から収穫量が減っていくと考える子が多数を占めるなか、部会の人たちの努力に思いを寄せ、「最後は、売れる方法を見つけてくれそうだから、減っていかないと思う【資料16】」と述べている。そして、話し合い後、「新聞を作って大村ラディッシュの良さをもっとたくさんの人に知ってほしい」と願うA子の姿からも、大村ラディッシュを守るために自分なりの関わり方を真剣に考えていることがわかる。そして、A子が作成した新聞や、他の子が作成した大村ラディッシュを宣伝する広告やマスコットは、J A豊橋で展示してもらい、一般の人達に見てもらうことにした。他にも、ラディッシュを使った新しいメニューを考える子や、ラディッシュを使った料理を家庭で作ってもらい試食した子もいた。部会の人々の思いに寄り添うことで、自分なりの関わり方を探る子供の姿を見ることができた。

から、減っていかないと思う【資料16】」と述べている。そして、話し合い後、「新聞を作って大村ラディッシュの良さをもっとたくさんの人に知ってほしい」と願うA子の姿からも、大村ラディッシュを守るために自分なりの関わり方を真剣に考えていることがわかる。そして、A子が作成した新聞や、他の子が作成した大村ラディッシュを宣伝する広告やマスコットは、J A豊橋で展示してもらい、一般の人達に見てもらうことにした。他にも、ラディッシュを使った新しいメニューを考える子や、ラディッシュを使った料理を家庭で作ってもらい試食した子もいた。部会の人々の思いに寄り添うことで、自分なりの関わり方を探る子供の姿を見ることができた。

(2)今後の課題

本実践を通して、地域の産業を教材化し、課題を友達と話し合うことで学習を深めていく子供の姿がみられた。また、その過程で地域の産業と自分との関わりに気づき、地域の産業を守っていける社会とは、持続可能な社会であり、将来の主権者としてその実現を目指す子供の姿もみられた。しかし一方で、日本の農業が産業として今後も成り立っていくのか、とても厳しい状況にあることに変わりはない。大村のラディッシュ農家の将来を簡単に楽観視することはできない。持続可能な社会とは、どのような社会なのかということを、それぞれの分野で具体的に考えていく必要がある。そして、その実現を目指す子供の姿を現実の子供の姿から思い描き、そのための手立てを模索していくことが今後の課題である。

大村ラレシが今、後つぎ不足やラレシの値段が安くても、大村ラレシが日本一をずっと守ってほしいです。この学習を

【資料13】単元を終えた時のA子の感想① (7/15)

・後つぎが不足している。
↓
ラレシが安くなっている。もう
もうかれは後つぎ
が出てくる。 (苦しい!!)
↓
後つぎが不足しているから
高れい化

【資料14】伊藤さん・鈴木さんの話を聞いた時のA子のノート (6/21)

他にも、7段階に分けていることが知らず、う段階ぐらいたと学習する前は、思っていました。部会の役わりも知りました。みんなでラレシ作りをやった。さいはい技術も高めたりますことも初めて知りました。

【資料15】単元を終えた時のA子の感想② (7/15)

大村園芸部会は、ラディッシュが売れる方法や、有めいになる方法を一生けん命考えているから、最後は、売れる方法を見つけてくれそうだから、減っていかないと思う。

【資料16】「大村ラディッシュの収穫量は、これからどうなるのかな」に対するA子の考えの一部② (6/23)